

シュティフター『晩夏』(4)

鈴木善平

Adalbert Stifters “Nachsommer”. (4)

SUZUKI Zenpei

Heinrich begegnet dem alten Risach. Den beiden ist die Liebe zu dem Kleinen gemeinsam, und zwischen Risach und Heinrichs Vater auch gibt es viele Gemeinsamkeiten. Heinrich wird von Risach aufgenommen, und bei diesem Gastfreund wird von nun an die Gesamtheit des Wesens des jungen Heinrich eine entschiedene Förderung erhalten.

『晩夏』は、一つには、この物語の語り手である若いハイリンヒが、自己を形成して行く物語である。さきに拙論「晩夏(3)」で、『晩夏』第1巻第1章「家庭」と第2章「旅人」を取り上げ、ハイリンヒが、幼年時代からやゝ長じて自然研究者となるまでの時期に、どのように教育を受け、どのように自然とかかわって来たかを見た。この時期は、ウィーンで商業を営む富裕な家庭で育った彼の、いわば家族の内での自己形成の時期であった。

本小論「晩夏(4)」では、それに続く第3章「雨宿り」と第4章「宿泊」の二つを取り上げる。ここでハイリンヒは、リーザハという人物と出会う。以後ハイリンヒは、リーザハを度々訪れ、彼と彼をめぐる人々の内で、彼の感化を受けつつ自己を形成して行くことになる。その発端がこの両章で語られる。

ハイリンヒは、地表形成の研究のための山歩きの途中、空と雲の有様から雨が迫っていると予測し、丘の上の一軒の家（「薔薇の家」）に雨宿りを乞う。一番近いからである。その家の主人は雨は降らないであろうと言い、ハイリンヒは降ると主張する。雨が降るか降らないかの予測は、結局雨は降らず、家の主人の方が正しかった。ハイリンヒは、予測の正否を確かめるためにと言われて一泊し、更にすすめられて一泊して、ここに二日二晩滞在することになる。この家の主人が老リーザハである。ハイリンヒがリーザハのもとに滞在した二日二晩の間（そしてその後も何年もの間）、二人は名前を名乗らず、互い

に相手の名前を知らないままであった。それゆえ語り手ハイリンヒは、リーザハを「家の主人」と言っている。

この滞在中にハイリンヒが見聞きしたことや、リーザハの正しかった予測の根拠をめぐる問答を通して、我々はハイリンヒとリーザハには共通する点のあることに気付く。

1. 自然研究における共通点。リーザハもまた自然をよく観察し、ハイリンヒと同様に、小さいものの偉大さについて考察している。
2. 整頓と趣味に関する共通点。ハイリンヒの父とリーザハは、この点について、全く同じと言ってよいほどに共通している。
3. そしてハイリンヒはこのようなリーザハに迎え入れられる。

ハイリンヒは、こうして、自分の家族と同類の者たちの内で自己を形成して行くことになる。

I

自然の観察・研究における共通点。

前述の如く、雨は降らず、予測はリーザハの方が正しかった。しかし、ハイリンヒの雨が降るとした予測の根拠は、リーザハもまた認めるどころであり、その根拠にもとづく限りでは、リーザハも雨が降ると予測せざるを得ない。自然科学用の器具、特に晴雨計・寒暖計・空の青さをはかる器械・湿度計等の観察の結果では、すべての徴候は雨を告げていたと

ハインリヒは主張し、リーザハもこれに同意する。

しかしまだ話題になっていない徴候で、ハインリヒの見逃している徴候があると、リーザハは指摘する。「ご存じかと思いますが、ある地域にだけ特有の前兆があって、それは代々伝えられてきた土地の人にしかわからないものです。このような経験は科学的にその根拠が明らかにされることがよくあるのです。(略)この地方にもそのような特徴がありますが、昨日は雨を知らせるようなものはありませんでした。」¹⁾

このような前兆は、しかし、すべて非常に大ざっぱなものであって、我々の気づかないところに反対の徴候があるのかもしれない。そこで、もっと遙かに精密な天気予報装置があると言って、リーザハは、動物の神経と植物を挙げる。

動物や植物の有様から天気を予測することができることは、ハインリヒも気がついていました。リーザハの家で次のように言っている。「こうして鳥の歌を注意して聞いているうちに、すぐ別のことに気がついた。雷雨が追って大気がうっとうしくなると、普通森の鳥たちは沈黙する。(略)森の鳥たちが鳴いているのは、雷雨がくるという私の予測にとって具合のわるい徴候のようにみえる。」²⁾ また植物による予測については次のように言っている。「薔薇の季節に咲く花が咲き匂っている。ちょうど空には雲が重くたれこめているので、花の香りは普段よりも一層強く感じられる。これは雷雨を予告するものだった。」²⁾

さてリーザハは言う、「多くの動物は雨と日光に非常に支配されています。天気か雨かとういうことが生命にかかわるような動物もあります。そこで、神は当然こういうことを予め感ずる器官を彼らに与えたのです。(略)その行動の結果が安全であるとすれば、このような予知の感覚は確かなものに違いありませんし、人間が製作したすべての科学的装置が反応しなくても動物の神経は感じているのですから、動物の動きをよく観察した結果にもとづく天気予報は、科学的装置を集めた場合よりも、より多くのよりどころを与え得るのです。」¹⁾

そしてリーザハは小さいものたちに言及する。

「天候を一番よく知っているのは昆虫、一般的に言って小さな動物です。(略)このような小さなものの生活を観察し、その居住状態をよく見て、何度も彼らのところへ行ってどのように時間をすごしてい

るかを知り、彼らの生活範囲の限界がどこにあり彼らの幸福の条件が何であるか、そしてそれにどのように従っているかを調べなければなりません。(略)しかし、これには、万事そうですが、愛情が必要です。」¹⁾ 「昨日は私のこれまでの経験に照らして、庭にいる小さな動物中のどれ一つとして、雨が降る徴候を示さなかったことだけ申し上げます。(略)この動物たちは観察の際一度も私を欺いたことはありません。ですから大ざっぱな科学器具は降雨を予告していましたが、雲が広がるだけと結論したのです。もし雨が降るようでしたら、動物たちが知っていたはずです。」¹⁾

小さな動物たちのもとにおけるこのような観察と結論について説明しつつ、リーザハは、小さいものと大きいものについて述べる。「いつも自己自身と自分の働きを世界の中心と思っている人々は、これらのものたちを小さいと思っています。しかし、神のもとではそうではないのです。我々の尺度で何回でも測れるものが大きいということはないし、測る尺度のないものが小さいというわけでもありません。これは神があらゆるものを同じ配慮で扱っておられるのでわかります。私は、人間とその行為の研究いやその上、人間の歴史の研究さえも、自然科学の一部門にすぎないのであって、ただこの部門は我々人間にとって動物にとってよりは重要なだけなのだ、なんども考えました。この点でさまざまな経験をし、心にとめるような機会があったのです。」¹⁾

ところで、ハインリヒとリーザハは、はじめに、お互いに相手に対して次のように言っている。まずハインリヒが言う。「私は自然の研究者と申してもよろしい者です。もう何年も、自然の事物を観察し、特にこの辺の山について研究をしております。私の経験によりますと、今日この地方とこの家に雷雨が来るように思われるのですが。」²⁾ これに対してリーザハは答える。「私は自然の研究者ではありませんし、自然科学の勉強をしたわけでもありませんが、自然に関する本を読み、長い間自然の事物を観察して、(略)このような努力のおかげで、今日の天気について、はっきりとした徴候をつかんでいるのです。(略)この丘には決して降らないでしょう。」²⁾

ハインリヒもリーザハも、このように自分を自然の研究者または自然の観察者とみている。拙論「晩夏(3)」において、ハインリヒの自然研究の態度について考えたが、彼は窓ガラスの氷の花と山嶽地帯の

地表の形態とを同じものとして見る。この小さいものと大きいものと同じものとしてみる彼の研究態度は、我々をシュティフターの『石さまざま』の「序文」へ導く。同様に、リーザハもまた自然の観察に際して、小さいものと大きいものと同じであると見ていて、我々をこの「序文」へと導くのである。ここにハインリヒとリーザハの自然研究・自然観察における共通点を見ることができる。

II

整頓と趣味に関する共通点。

ここでは、ハインリヒの父とリーザハとの共通点について見る。ハインリヒはリーザハの家で整頓に関した趣味に関しいろいろと見聞して、度々父のことを思い出した。同じだったからである。

1. 整頓に関する共通点。

それぞれの部屋は、ただ一つの使用目的のために作られ、使用後は使用の跡をとどめてはならなかった。

ハインリヒの父の場合。「食事のあとなどすこしでも暇があると、よくこの書棚の前に立って、とびらをあげ、書物をながめ、一二冊とり出すと、ちょっと中をのぞいては、また元の場所におさめている。」³⁾「読んでいた書物は、いつもきちんと、書棚におさめた。父が出てきたあとすぐに書斎に入っても、今しがたまで、誰かがここにいる、読書をしてきた気配は全く認められない。どんな部屋でも使ったあとが残っているはいけなないのであって、いつも客間のようにきちんと片づいていなければならなかった。」⁴⁾「父の言う『雑な部屋』、つまり寝室でもあるし遊び部屋でもあり、またその他でもあるというように、同時にいろいろなものになるような部屋を父は好まなかった。——どんなものでも、どんな人間でも、ただ一つのものにしかねないが、この一つのものに完全にならなければならないと、いつも言っていた。」⁴⁾

リーザハの場合。ハインリヒは休息していた部屋で、書棚から本を取り出して読んでいた。リーザハが食事の知らせにきた。ハインリヒはこう語る。「私は本を椅子の上において行こうとした。しかし彼はその本を手にとって、書棚の元の場所においた。『失礼ですが私どもでは、部屋で待っているときなど、書棚の本を自由に読めるようにしてありますが、読んだあとは、部屋の様子が変わらないように、書棚に

戻しておくのです。』²⁾「家の主人は、この部屋は自分の仕事部屋であると言ったが、仕事の跡らしいものはなにも見当たらない。すべてのものが収納されているか、あるいは、元の場所においてあるのだろうか。」¹⁾「隣が閲覧室だった。(略)壁際には数種類の椅子や机や斜面机があって読書のために大変都合よくできている。(略)よみかけの本などはどこにも見当たらないのに気がついた。」¹⁾「この部屋の使用目的については別にたずねなかったが、家の主人もなにも言わなかった。」¹⁾

尚、ハインリヒの父の「整頓」に対して家族の者はどうであったかと言えば、「母はやさしい人で私たちを大へんかわいがってくれた。(略)家中まめに歩きまわり、整理整頓に気をくばり、父の方針に従って、例外は一切許さなかった。」⁵⁾そしてハインリヒと妹も、「このきびしい几帳面な性格は私たちの心に深い感銘を与え、両親の命ずることには、たとえ理由がわからない場合でも、従うようになった。」⁴⁾とある。

2. 趣味に関する共通点

絵画と家具の趣味におけるハインリヒの父とリーザハとの共通点を挙げる。古いものを好むことも共通している。

その1. 絵画の趣味

ハインリヒの父の場合。都心から移り住んだ郊外の家では、「特別に絵のための部屋を一つ設けた。以前は部屋が足りないので、絵を方々の部屋に分散しておかなければならなかったのである。この新しい絵画室の壁は濃い赤褐色の壁掛けでおおわれていて、金の額縁がくっきりと際立って見えた。(略)父は茶色の木で画架を作らせて、この部屋に据えておいた。絵を一枚づつおいて、ちょうどよい光にあてて眺めるためである。」⁶⁾

リーザハの場合。「次はかなり大きな部屋で、壁には絵がかけてあった。みな金の額縁におさめた油絵である。(略)間隔がなくて壁が見えないほどである。(略)画架が一つおいてあるが、時々絵をその上に乗せて、近くで観賞するのであろう。父の絵の部屋を思い出した。」¹⁾

古い建築物を忠実に模写した図面を見て、ハインリヒは次のように述べる。「これらの図面をよく見ているうちに、特に気づいた点があった。それは、建物の装飾で、植物や動物のような自然物を模した場合に著しい誤りがあったのである。(略)私は自分で

絵を描いているとき、父の持っている絵を度々観察して、父がとてもよい絵であると言っていたものの中にも、これに似た誤りを見つけたことがあった。父の絵は古い時代のものであるし、この図面も古い建築物をあらわしているのだから、これはおそらく実際の建築物をそのまま模写したのであって、装飾の誤りは実物の中にもあるし、誤りのないものは実物でもやはり誤りがないのであろうと判断した。これまでの図面が非常に忠実なことが証明されるわけで、一層すぐれたものと思われたのであった。¹¹⁾「私は父が集めている古いものに生まれたときから取りかこまれていたのに、あまり理解していなかったのに気がつき、これから勉強しなければならないと思った。」¹¹⁾

その2. 家具の趣味

ハインリヒは部屋々々の家具を見て父を思い出す。彼はリーザハの書斎に案内される。「この部屋に足をふみ入れたとき、父の姿をさまざまと、懐しさに似た気持ちをこめて、思い浮かべた。(略)普通の部屋だが、父の好きな古い家具が備えつけてある。しかし、実に立派で、いままでこれに近いものを見たことがないように思われた。私は家の主人に父の趣味と、父がもっている家具を手短かに話し、家に帰ったらこの部屋の家具について父に話して聞かせたいので、十分とはいかないまでも細かな点まで説明ができるように、詳しく観察させてもらうように頼んだ。家の主人はよろこんで私の求めに応じた。」¹¹⁾こうして、その大きな美しい書棚つき書きもの机の装飾が精密に語られる。「家の主人は、この家具を注意深く観察している私のそばにいて、さまざまな部分を示し、私のわからないところは求めに応じて説明してくれた。」¹¹⁾

指物細工の工房では仕事の最中だった。「この仕事も、父のしていることに似ているように思った。父は若い職人を仕込んで、指示通りに古い家具類を修復させていたが、ここにあるものも、そのような仕事をする作業場だった。」¹¹⁾ ちょうどテーブルの鏡板を扱っていたが、それにはさまざまな楽器がかたどられていて、「それらの楽器は一つ一つがとても美しく、マンドリンなどは、父がもっている古い絵の中でもこれほど美しいものはないと思われるほど形がきれいにととのっている。」¹¹⁾

以上に多く引用した所から明らかなように、ハインリヒの父とリーザハには、多くの共通点が見られ

る。即ち、リーザハはハインリヒ並びにその家族と同類の者であって、異った者ではない。従ってハインリヒがリーザハと出会いその感化を受けて自己を形成して行くことは、家族同様の者の内において自己を形成して行くことに他ならない。

III

ハインリヒはリーザハに迎え入れられた。

家の部屋々々を案内されて家具工房に来たとき、ハインリヒはリーザハに言う。「人間の行く道は、さまざまですが、雷雨のために私をこちらに導いた道はとても良いものであったかもしれません。そして私はもう一度この道を参るかもしれません。」¹¹⁾

結果から言えば、ハインリヒはその後しばしばリーザハの家を訪れる。そして更に結果から言えば、何年かののちハインリヒは、老リーザハの若き日の恋人マティルデの娘ナターリエと結婚する。リーザハは、マティルデの息子、ナターリエの弟、を養子としている。それ故ナターリエはリーザハの娘にも当り、従ってハインリヒはリーザハの息子になることになる。この結婚を以て、3巻17章からなる長編『晩夏』の物語りは終る。

ところで、第1巻第3章「雨宿り」と第4章「宿泊」の両章には、ハインリヒが、リーザハの家族の一員となるほどに迎え入れられたことを示す確たる表現は見当たらないように思う。

上に挙げた、「人間の行く道は、さまざまですが、雷雨のために私をこちらに導いた道はとても良いものであったかもしれません。そして私はもう一度この道を参ることになるかもしれません。」というハインリヒの言葉に応えるリーザハの言葉は、「本当におっしゃる通りです。人間の道はさまざまです。もっと年をとられたら、この言葉の本当の意味がおわかりになることでしょう。」¹¹⁾というのであった。これは歓迎の表現とは考え難い。

ハインリヒとリーザハのこの会話に関しては、のちになって、ハインリヒとナターリエの結婚式のと、リーザハ自身が皆の前で語った言葉がある。「ハインリヒ君。(略)しよせんは、すべて、私のおかげでしょう。君はこの家をはじめ訪れたとき、家具工房で、人の行く道にはさまざまなものがあるけれども、雷雨のためこの家に自分を導いたのは大変良い道であったかもしれないと言った。それに対して私はその通りだ、もっと年をとったら、それがよく

わかるだろうと答えた。そう答えたのは、私自身の経験にてらして、人の道というものは、年をとってからはじめて展望できるものと考えていたからだ。しかし、私の言葉が今日ここにもつような意味をもとうとは、あのとき、誰が考えたであろうか。そして、すべては、君があくまで雷雨がくると言って私の反論を信じようとしなかったことで始まったのだ。」⁷⁾

リーザハが、「その通りだ、大変良い道だったのだ。」と答えた通り、あのときハインリヒを導いた道は、今日のこの結婚式に通じる大変良い道であった。今日ここにもつような意味をもつ、即ち今日ここで行なわれているこういうことになることは、あのときには誰にもわからなかったが、リーザハにはわかっていた。そしてリーザハの言ったとおりになった。

リーザハにはわかっていた。

ハインリヒとナターリエの結婚がきまったのち、リーザハはハインリヒに言っている。「あなたがはじめて私の家の格子の前に立っているのを見たとき、これはもしかするとナターリエの夫になる人かもしれないと思いました。」⁸⁾ また、婚礼の宴席でリーザハはナターリエに言っている。「ナターリエ。どうだろう、私はお前のために、本当に良い夫を選んだのではないかな。お前はいつも私にはこういうことはわからないと言っていたけれど、私はひと目みてわかったんだよ。電気のように速いのは愛だけではない。人を見る眼もそういうものなのだ。」⁹⁾

リーザハにはわかっていた。彼はハインリヒを自分たちの内に迎え入れた。ハインリヒは、リーザハの感化を受けつつ自己形成を進めて行った。ハインリヒがナターリエとの結婚に賛成してもらうために家に帰ったとき、父は言う。「お前は薔薇の家の御主人の許で本当にあらゆる点で、人間的に決定的な成長をとげた。なんどもお訪ねする度ごとに、すばらしい成果を持ち帰った。」¹⁰⁾

IV

結び。

『晩夏』の舞台は、解放戦争後、三月革命以前の時代(Vormärz, 1815頃—48頃)のオーストリア帝国にあると推定されている。ウィーンで商業を営み、その郊外に家をもって住んでいる富裕な家族の家庭と、皇帝の高官の職を辞し、アルプス山脈の麓アスペルホーフの丘に家をもつ老男爵リーザハの家。こ

の両者に共通して見られるものは、小さなものへの愛、整頓の尊重、絵画や家具の趣味の生活、古いものの愛好と蒐集などである。これらは、ビーダーマイヤー的要素である。ハインリヒの自己形成は、ビーダーマイヤーの生活の場で行なわれているということができよう。

ビーダーマイヤーの生活の求めるものは、親しい者のまどい、静穏、節度、謙抑などである。そこでは、異った者・敵対する者との出会いや、それとの葛藤・戦いは求められておらず、従ってそのような葛藤・戦いを通して自己を形成して行くことはあり得ない。ハインリヒの自己形成が、同類の者と出会いその者に親しく迎え入れられることによって進められることになる所以である。

テキストと参考文献

Eben, K. und Müller, F.: Adalbert Stifter Sämtliche Werke VI, VII, VIII, Gerstenberg Hildesheim, 1972. 以下SW VI, SW VII, SW VIIIと略記する。

藤村 宏:シュティフター晩夏, 集英社, 東京, 1986, 引用した訳文はこの書による。但し必要に応じて部分的に逐語訳させて頂いた。

大澤峯雄:シュティフターの『晩夏』について, 名古屋大学教養部編「紀要」, 2, 53-79, 1957.

石田明文:ニーチュと『晩夏』, 希土, 17, 84-99, 希土同人社, 京都, 1988.

Glaser, H. A.: Die Restauration des Schönen, StifTERS "Nachsommer", J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1966.

Wildbolz, R.: Adalbert Stifter Langweile und Faszination, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart Berlin Köln Mainz, 1976.

注

第1巻第3章・第4章からの引用文は、多数なので、頁は挙げず、章を示す。

1) SW VI 4. Die Beherbergung.

2) SW VI 3. Die Einkehr.

3) SW VI S. 2.

4) SW VI S. 3.

5) SW VI S. 4.

6) SW VI S. 6.

7) SW VIII S. 220.

8) SW VIII S. 173.

9) SW VIII S. 219.

10) SW VII S. 320.

(受理 平成2年2月20日)